



数学者たちの黒板

ジェシカ・ワイン著、徳田功訳（草思社・3850円）



数学者にとって、黒板に代わるものは黒板しかない。これだけコンピュータ技術が進歩した今日でさえ、だ。最年少13歳で数学オリンピック金メダルを獲得したテレンス・タオら109人の数学者による109枚の板書が右ページに載り、左ページには板書した本人による数学の解説と黒板への思いがつけられる。評者は数学を一般向けに啓

蒙・啓発する (enlighten) ことを仕事にしている。執筆や講演を続けてきて、それは簡単

に挑戦し、見事に成功している。最大の要因は著者「ジョシカ・ワイン」が写真家であることだ。撮影された黒板写真はまさに彼女の作品である。黒板および板書のディテールから、印刷された数学書では伝わらない数学のリアリティーを感じることが出来る。

これほどに数学の板書を紹介した書籍を、評者は知らない。黒板は数学者を撮影する際、背景に入り込むだけのものだった。本書に数学者の写真は一切なく黒板だけ。著者が数学者に依頼して書かせた板書であることに驚かされる。モデルの表情がカメラマンによって引き出されるように、著者によって引き出された板書の風景である。

ではないことがわかった。数学は目に見えない存在——概念だからだ。印刷された数字や数式は概念をシンボル化したものであって、正体ではない。ところがその目に見えない数学は、目に見える現実世界を記述し説明する。はたして数学は人間社会を変える力を持つ。

数学ほどその実体が知られていない世界はない。難解さに加え、想像できないほど広大だからだ。本書は数学世界を一般に紹介するという難題

109 という庄巻の板書に、著者の数学に対する並々ならぬ思いを読みとることが出来る。109の板書のおかげでわかった「数学とは何か」が、あとがきに整然と語られる。

本書は絵本のようだ。見るだけで難解な数学世界にわくわくさせられる。読めば数学者の心の内を感じることができるといっていい。

評・桜井進
(サイエンスナビゲーター)

難解な世界 わくわく

夢野寧子著 (講談社・1650円)



梅雨の時季になると生育できない余分な草落とす「ジューンボコ」という自然現象がある。群像新人文学賞をた夢野寧子の『ジューツプ』を読んで初めた。本書はある家族の揺らぐ少女の心情を、に間引かれた青い果実あわせて繊細に描いて主人公の椎谷しずく校2年生。金銭的に余る家庭で生まれ育ち、

家族の

ジューンドロップ⁰

も愛されている。しかも頭痛の発作と母親の不在が、一問違ひなく幸福も「であるはずのしずく」に影を落とす。家のある地蔵堂で、しずく年のタマキと出会う。堂には地蔵を縄で縛っかける「縛られ地蔵」た。しずくとタマキは遊ぶようになるが……

激しい頭痛に襲われしずくの視界に奇妙なものが現れる。これは「閃光」と呼ばれる症状だ。芥

やざぐれトラックドライバーの一本道迷路

(KADOKAWA・1595円)



物流・運送の「2024」

年問題」が迫っている。来年4月、働き方改革のための心配をしている人

の声を聞き、物流・運送業界への取材を重ねてエッセーにまとめた。自身も大型自動車一種免許を取り、父親が営んでいた工場で金型を運ぶドライバーとして日本各地、中長距離を三つご聖食と寺つ。

る問題」。カレー粉も、もタマネギも、製造・運ぶのはトラック。住スマートフォンも、私の便利な生活を支える全てのモノが「一度はトラックに乗っている」。

トラック輸送は「国